

ときめき インタビュー



…プロフィール…

1985年12月16日川口市で生まれ、間もなく越谷市に移る。出羽小学校(越谷FCジュニア)、武蔵野中学校(越谷FCユース)、浦和東高校、駒澤大学を経て、2008年2月、J1・川崎フロンターレ入団。ジュニア時代には全日本少年サッカー全国大会に、また、高校ではインターハイに出場。大学3年時、駒大の全日本大学選手権3連覇に貢献した。2007年にはユニバーシアードに日本選抜メンバーとして出場するなど、輝かしい戦歴をもつ。

引く手あまたの中から川崎フロンターレを選ぶ

菊地光将選手のプロ入りに際しては、駒大が全日本大学サッカー選手権大会で3連覇を達成したときMFとして活躍した選手だけに、多くのプロクラブから入団の誘いがあったそうです。

「どこにするか最後まで悩みました。そんなとき、昨年11月、川崎のホームでの浦和戦を見に行っただんです。そのときのスタジアムの雰囲気やサポーターの一体感などがすごくよかったです、このピッチでやりたいという気持ちがありました」

こうして2008年春、Jリーグ・川崎フロンターレが誕生しました。「大学とプロでは、サッカーの質もパスや展開のスピードも全然違います。毎日の練習を通してそれを身体で覚え、少しでもチームに貢献できるようにがんばらなければという気持ちでいっぱいです」

よき指導者との出会いで人間的に成長

菊地選手がサッカーを始めたの

は、「覚えていない」くらい幼いときのこと。サッカー好きの父親に連れられて健康福祉村の公園に行き、練習をさせられたことが「嫌でたまらなかった(笑)」というものの、出羽小学校1年生のときから所属した越谷FCジュニア時代には、全国大会に出場するなど、菊地選手のサッカー人生は、その名前のとおり光り輝いてみえます。

しかし挫折のときもありました。高校2年の冬、脚を複雑骨折。活動できない日々が続きました。「高3の進路相談のときは、もう、サッカーは辞めるつもりでした」

迷う菊地選手を「続ける」と励ましたのは、信頼する監督でした。「考えてみると、小・中・高・大と、本当にいい指導者に恵まれていたと思います。いま、俺はMFの中でもポランチという守備的なポジションにいますが、高校のときの監督に、背の高さを活かしてヘディングを練習しろと言われ、そこで自信ができました」

尊敬できる指導者との出会いを通して、自分自身も人間的に成長できた振り返る菊地選手。でも一番影響を受けた「専属コーチ」は、お父さんかもしれません。

休みは、越谷でのんびりと

プロデビュー戦に備えて、いまは寮と練習場を往復する毎日ですが、休みには必ず電車を乗り継いで越谷の実家に帰るそうです。「車だとガソリン代や高速代が高いじゃないですか」という言葉が華やかなイメージのあるプロサッカー選手の口から出ると、とても新鮮で、好感を覚えました。

「ふだんの俺は、全然オーラが感じられないとよく言われるんです(笑)」。なるほど、目の前にいる菊地選手は、実に穏かな好青年。それが一歩ピッチに入ると、闘志むき出しのラフプレーで退場処分を受けたこともたびたびとか。本来の温厚な性格は、出羽地区のどかな環境の中で育まれたものなのかもしれません。

ホームタウンを大切にしたい

Jリーグの各チームは発足当初から活動拠点とする地域との交流を大切にしています。川崎フロンターレのホームタウンは言うまでもなく川崎市。多くのサポーター

に愛されています。

「いまはプロとしてスタートしたばかりですから、川崎のチームカラーやフォーメーションに慣れ、結果を出すことを考えるのが精一杯です。でも、いつかは俺のホームタウンである越谷の子どもたちに自分の経験を伝えることも必要だと思っています」

身長182cmの菊地選手の入団で「青い山脈」と呼ばれる強力な守備が一段と強化された今期の川崎フロンターレ。ピッチを駆け回る背番号「17」菊地光将選手の活躍を応援したいと思います。

プロのサッカーは大学のそれとは質もスピードも違う。早く慣れて、チームのために貢献できればうれしい。

川崎フロンターレMF 菊地光将さん



健康福祉村の公園で嫌々ボールけりをさせられた幼児が、成長とともに才能を大きく開花、2008年、いよいよプロデビューします。サッカー界も熱い視線を送る大型新人・菊地光将選手に今後の抱負などを伺いました。

(撮影協力:川崎フロンターレ)